

© 東京新聞



肺炎は日本人の死因で三位を占める疾患です。高齢化や脳血管疾



肺炎の治療

患で、ものをのみ下す嚥下機能が低下すると、口の中のものが气道に入る「誤嚥」が起きやすくなります。特に寝ている間に誤嚥が起きると、肺炎を発症するといわれます。

肺炎は発熱や呼吸困難、たんなどが主な症状ですが、軽ければ、薬を服用しながら自宅で治療できます。

八十代のKさんは、認知症と診断され七年が経過しています。最近、嚥下が十分でなくなり、誤嚥による肺炎も頻発するようになりました。ある時、高熱と呼吸不全のため往診しました。血中の酸

嚥下が弱れば頻発も



指先につけた器具で血中の酸素量をチェックする

素が十分でない非常に危険な状態でしたが、ご家族との相談で、入院でなく在宅での治療を希望されました。

酸素吸入を行い、点滴による治療を始めました。幸い、肺炎は軽快しましたが、口から

の飲食は思うようできず、十分な栄養や水分がとれません。がんなど他の疾患がない場合、認知症患者が嚥下できなくなる状態は、病状として終末期に近いことを意味します。当院のデータで

は余命は三カ月ほどです。人工栄養のための胃ろうを作ることは一般的には行いません。

このような状態に、医療がどこまで関与できるかは難しい問題です。自分の親ならどうするか。在宅医療で当院が心掛けるのは、このような視点です。

結局、Kさんは点滴の回数を減らし、嚥下機能をチェックしながら、できるだけ口から栄養を取ることになりました。その後、点滴もやめられました。早晩また肺炎を起すと考えられます。この繰り返しを続けることになりません。(川崎高津診療所院長)

次回は十一月十三日掲載